2016.4.30

大学・地域連携推進事業結果概要書（魅力発信事業）
平成27年度「まちかど研究室」事業報告

「まちかど研究室」（以下、まち研）では、平成24年度からの継続事業として、大学の魅力づくり・情報発信や地域活性化に寄与する事業を積極的に続けている。事業実施４年目であった平成27年度は、それまでの３年間の活動を振り返り、更なる両大学の魅力発信と地域活性化のため、本事業の活動体制について全面的な見直しを行った。

拠点の運営と活動の実施主体を切り離し、より多くの学生、教職員がまち研に関わり、各チーム参加者の興味、関心、大学の専門性が反映される活動によって、本事業をより効果的に発展させることを目指した。具体的な内容として、(1)学生主体イベント、(2)各大学がゼミや授業単位で実行するプロジェクト、(3)市民向け講座の３つを柱とした活動を実施した。

なお、添付資料として、まちかど研究室プロジェクトを実施した６つのグループがまとめた活動報告書と、平成28年3月、新潟産業大学平成27年度卒業生が執筆した「大学地域連携活動報告書」（A4版100頁＋巻末資料）を提出する。個々の事業のより具体的な活動内容についてはこれらの資料を併せてご参照いただきたい。

１．実施体制の見直し

（１）事業実施体制の見直し

平成24～26年度の３年間のまちかど研究室においては、主に各大学のそれぞれ一つの研究室／ゼミの学生とその担当教員を中心としたメンバーが年間を通じて、すべてのイベントの計画実施、拠点の管理などを行ってきたが、まち研の活動が次第に地域に定着し、まちなかの様々な場面で学生の活動が期待される一方で、慢性的な人員不足と一部の学生、教員への負担過多、拠点の稼働率の低さが課題となっていた。また、学生の主体性を重視するあまり大学の「専門性」の発揮が表層的なものにとどまっていた点も指摘されていた。

これらの課題を解決し、更なる両大学の魅力発信と地域活性化のため、平成27年度はまち研の事業の活動体制について全面的な見直しを行った。拠点の運営は後述の「まち研運営委員会」）によって行われ、活動の実施主体と予算は活動別に設定されることになった。

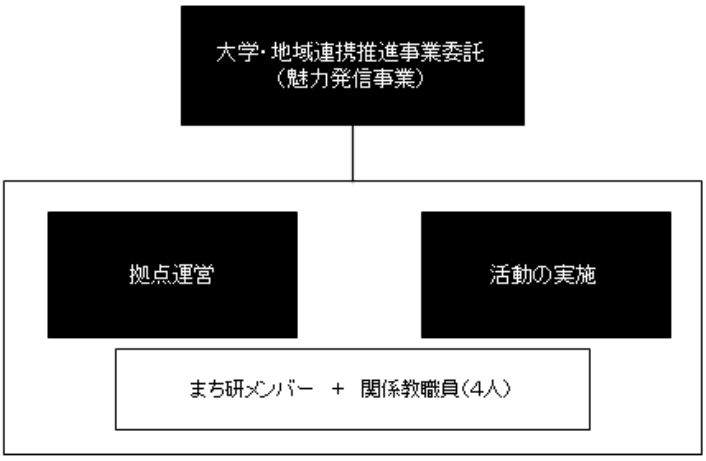
（２）「まち研運営委員会」の設置

拠点の運営と活動の実施を切り離し、全体の統括や拠点の維持管理に関しては、現在主に担当している教職員が構成員となる「まち研運営委員会」を発足し、適宜話し合いを行いながら各活動の管理を行った。月１回程度の打ち合わせを通じて、各活動の進行状況の把握や調整、地域からの要望についての検討などを行った。平成27年度の「まち研運営委員会」の構成員は以下の通りである。

＜まち研運営委員会＞

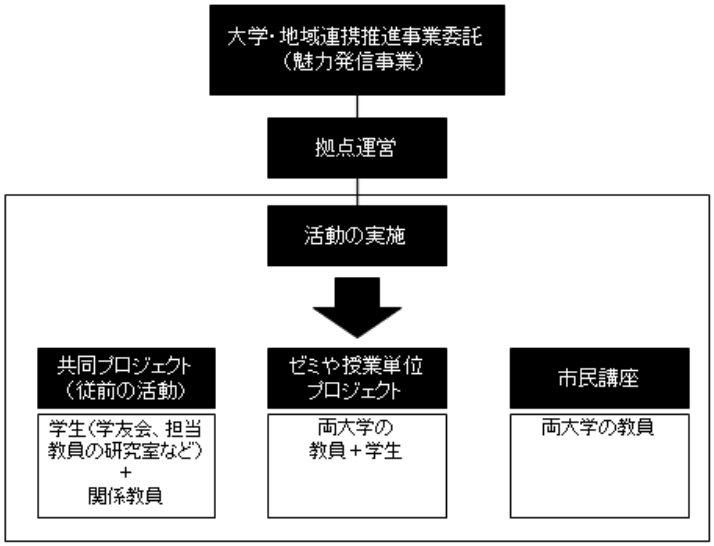
委員長	長聡子	准教授（工科大）
副委員長	権田恭子	講師（産大）
委員	加藤秀雄	総務課長（産大）
	内山一稔	学務課長（工科大）

※　委員長及び副委員長は、両大学で２年交代とする。
平成 28 年度は産大が委員長、工科大は副委員長を務める。



平成 24～26 年度のまち研体制

拠点の運営と活動の実施が同一メンバーによって行われる。
（学生が主体）



平成 27 年度のまち研体制

拠点の運営は「まち研運営委員会」（教職員）によって行われる。活動の実施主体と予算は活動別に設定される。

図１　まちかど研究室の事業実施体制の変更

２．実施結果

（１）学生主体イベント

「スタンプラリー＆オリエンテーリング＠商店街」

まち研の初めての試みとして、両大学の学友会（当日学生スタッフ 30 名）が共同で主催するイベントを実施した。まちなかの商店街を対象エリアに、小学生の参加する冬の賑わいづくりのための「スタンプラリー＆オリエンテーリング」を 12 月 12 日に開催した。駅前・駅仲・ニコニコ通り・ピッカラ通り・えんま通りの各商店街にある 46 店舗・施設の協力のもと、小学生 53 人が参加し、商店主らとふれあいながら冬の商店街を歩いて回り、まちなかに活気を与えた。商店街を歩くことで参加した小学生が各店舗や施設、柏崎のまちなかの魅力を知ってもらうことを目指した。

小学生は３人一組でスタンプカードを持ち、学生スタッフと一緒に２時間で 40 カ所以上の店舗、施設を訪れた。各チェックポイントでは店舗の商品などにちなんだクイズが出され、商店主とのコミュニケーションを楽しみながら、スタンプを集めた。スタンプラリー後は市民プラザにて工科大学食の協力で豚汁がふるまわれ、また、上位５グループには商店街の協力店などで使用できる地域通貨の「風輪通貨」などが贈られ、イベントを通じて知った店舗での買い物が楽しめる仕組みにした。参加者 30 名へのアンケートでは「楽しかった。また参加したい」との意見が多数を占め、天候にも恵まれ、初の試みはおおむね成功であったと言える。

写真１　スタンプラリー＆オリエンテーリング＠商店街

（２）各大学がゼミや授業単位で実行するプロジェクト（各団体の実施報告書参照）

少額の活動資金をゼミや授業に補助して、各大学の専門性を活かした「まち研」を利用する活動や研究を実行した。平成 26 年度に二大学内から申請された３団体のプロジェクトを採択、実施したが、平成 27 年度はこれをさらに発展させ、計６団体の活動・研究を実施した。５月に参加プロジェクトを決定、各団体の目的や学生の興味関心に合わせた多彩な活動が行われた。３月には参加団体による報告会を開催し、情報交換を行った。

①　「風輪通貨による柏崎活性化のための、柏崎の魅力発信ホームページの作成と風輪米の生産風景のパネル展示」（産大　阿部ゼミナール、宇都宮ゼミナール）

米本位制地域通貨「風輪通貨」の取り組みを、市民に対してパネル展示等を通じて広報し、風輪通貨流通活動の本来の目的である、地元商店への消費者の誘導を目指した。商店街での風輪通貨の使用額が約 10 万円（日本円換算）になり、商店街への人の流れができてきた。

写真２　風輪米の生産風景と風輪通貨（まち研 Ver.）

②　「まちかど研究室 Café」（産大　権田ゼミナール）

まち研拠点で学生が運営する Café をオープンした。商店街を訪れた方に気軽に立ち寄って飲食、休憩するスペースとともに、市内高校生に放課後の学習スペースを提供することを目指した。12 月、１月にのべ 11 日間、16 時～20 時のスペース開放を行い、のべ約 60 名が利用し（約半数が柏崎高校などの高校生）、冬の商店街に明かりを灯した。

写真３　まちかど研究室 Café

③　「柏崎市の地域経済に関する調査・研究」（産大　八木ゼミナール）

少子高齢化が進む中、柏崎市においても子育て支援の拡充や、高齢者の生活支援などといった、地域ニーズが増大している状況を踏まえ、下記の２つのテーマについて調査研究活動を行った。テーマ１「コミュニティにおける小規模デマンド交通の可能性」（米山コミセンでの導入事例を三条市の事例と比較検討）、テーマ２「“子育て支援パスポート事業”の自治体アンケート調査」（新潟県内の自治体へのアンケートを実施）

写真４　まち研におけるミーティングと「柏崎に関する研究発表会」でのプレゼンの様子

④　「柏崎のまちなかをＰＲするフリーペーパー制作」（工科大　長研究室）

駅前通り～ピッカラ通りの商店街の飲食店の情報を掲載したフリーペーパーを制作し、まちなかの商業施設や公共施設、ホテル、公営住宅等でテスト版 200 部、本番用約 700 部を設置・配布した。さらに、制作したフリーペーパーに対する印象評価やフリーペーパーの効果について、市民や商店街店主にアンケート調査を行った。

写真５　フリーペーパー「ｍｅｍｅ（ミーム）」（本番用）

⑤　「まち研を活用した廃食用油回収と循環型社会システムの紹介」（工科大　再生可能エネルギー研究同好会）

まち研を拠点として廃食用油回収し、ＢＤＦ燃料（バイオディーゼル燃料）生成の原料とした。６月から３月に計 13 回まち研を活用し、合わせて商店街の交通量調査も行っ

た。11 月以降は廃食用油回収時に燃料生成時につくられる液肥を使用して卒業生が栽培したにんじんの販売も行い、循環型社会システムのＰＲにもつなげることができた。

写真６　廃食用油回収ＢＯＸと液肥を利用して栽培したにんじんの販売

⑥　「まちなかお掃除隊」（工科大　グリーンバード柏崎チーム）

両大学の学生やまち研近隣の小中高校生、商店街店主、近隣企業の就業者の方々などからボランティアを募り、まち研周辺の商店街を定期的に清掃する活動を実施した。7 月～10 月に計４回、まち研～海岸周辺の清掃を実施し、特に初回の 7 月 12 日には、学生、教職員のはか、ニコニコ通り商店街や事業所の関係者など、総勢 42 名が参加した。

写真７　グリーンバード柏崎チームの清掃活動

（３）市民向け講座

高校生を対象とした入試広報、高齢者を対象とした生涯学習を主な目的とした講座等を想定し、両大学が定期的に市民向けの講座・セミナーをまち研内で実施した。月１回ペースを目安に産大、工科大が交代で合計７回開催した。大学生や院生が講師を務めた講座もあり、それぞれのテーマによって対象者は多岐に渡り、小学生から 70 歳代までの多様な年齢層の地域の方が参加した。告知はチラシ、ポスターの他、『柏崎日報』にご協力いただき「催し物」欄へ随時掲載され、特に社会人向けの講座については、集客に効果があった。

①「季節のハガキ、ポストカードづくり」（産大）
開催日：５月 22 日
講師：産業大書道部顧問　宮嶋美恵子さん、学生スタッフ　書道部２名
参加者：７名（社会人）
　柳やあじさいなどの季節の植物や翌年の干支であるサルなど、はじめての絵手紙に挑戦した。

写真８「季節のハガキ、ポストカードづくり」

②「建築模型の制作体験」（工科大）
開催日：７月９日、10 日
講師：工科大　長聡子准教授　大学院生１名
参加者：６名（常磐高校生、工業高校生）
　安藤忠雄が設計した「住吉の長屋」という住宅の模型を制作した。

写真９「建築模型の制作体験」

③「第１回　中国語サロン」（産大）
開催日：７月 31 日
講師：産大　詹秀娟（センシュウケン）教授
参加者：約 20 名（社会人、留学生ほか）
　中国茶を飲みながら中国の文化や社会のことについて考え、旅行で役立つ中国語会話を学んだ。

写真 10「第１回　中国語サロン」

④「３Ｄプリンタ体験！」（工科大）
開催日：８月４日
講師：工科大　小林義和准教授、笹川圭右助教
参加者：10 名（柏崎小学校児童）
　３Ｄプリンタのしくみを学ぶともに、オリジナルのロボットを制作した。小学生に大学での学びを身近に感じてもらえた。

写真 11「３Ｄプリンタ体験！」

⑤「パソコンでキャラクターを描いてみよう！」（産大）
開催日：10 月 23 日
講師：産大　権田恭子講師　学生スタッフ５名
参加者：10 名（小学生、学生、社会人）
　デザインソフト（Illustrator）を使って簡単なキャラクターを描いた。またカフェ企画と連動した学生によるドリンクふるまいも行った。

写真 12「パソコンでキャラクターを描いてみよう！」

⑥「生きてる！？磁石で動く魔法スライム」（工科大）
開催予定：11 月９日
　学生が講師となって、小学生を対象とした化学実験を企画したが、参加する方がいなかったため、実施できなかった。

⑦「第２回　中国語サロン」（産大）
開催日：12 月 11 日
講師：産大　詹秀娟（センシュウケン）教授　学生スタッフ８名
参加者：約 10 名（社会人）
　「中国語でテレサテンを歌いましょう♪」をテーマに名曲を日本語の歌詞と中国語の歌詞を読み比べ、歌いながら、楽しく学んだ。またカフェ企画と連動した学生によるパンケーキとドリンクふるまいも行った。

写真 13「第２回　中国語サロン」

（４）えんま市での出店
　上記の３つの柱となる活動以外に、前年度までと同様、えんま市の開催３日間にまち研スペースを活用して祭りに参加した。「たな米」、「ふふ豆」といった大学×地域コラボ商品の販売、３Ｄプリンタのデモンストレーションや、旧「喬柏園」のネーミング募集などを行った。また、室内は休憩スペースとして活用してもらうと同時に、「高柳デザインコンペ」や「大学は美味しい!!フェア」など、二大学における地域連携活動の様子を紹介したパネル展示を行った。

写真 14　えんま市への参加の様子

（5）ウインターイルミネーション

例年実施されているウインターイルミネーションであるが、本年度も 12 月初旬～２月中旬に、商店街店主の方々にご協力いただき、ニコニコ通り商店街の一部アーケードおよびまち研の室内にイルミネーションを設置した。きらびやかな明かりで、冬の商店街を華やかに照らすことができた。

写真 15　ウインターイルミネーション

（6）まち研のスペース貸し

まち研の拠点を大学生以外の地域の方々にも提供し、さまざまなまちづくり活動や人々の集う場として活用してもらうため、前年度から引き続きスペース貸し事業を実施した。まち研の稼働率を高めるためだけでなく、地域の方にまち研を身近に感じてもらうこと、地域の方の活動に学生が興味関心を持ち、交流の契機となることなどの意義が挙げられ、今後も随時展開していきたい事業である。下記の継続的な講座のほかに単発で大学内外の団体の打ち合わせや、学生の卒業研究などにも活用された。

①　子ども向け英語教室

前年度より継続して、小学生を対象とした英語教室を実施した。講師は市内在住の青柳ミハエラさん。学年別に毎週火曜日、水曜日の２クラスを 10 月末まで開講、最終回には２クラス合同のハロウィンパーティーを開催した。受講していた子どもたちは毎週まち研に

通うことにより、このスペースに親しみを感じてくれたようで、他の曜日にもまち研を覗いて学生に話しかけてくる場面もあり、また、玩具や黒板などで遊んだりしながら、楽しく学んでいた様子が伺えた。

②　社会人向けビジネス講座「絶対に知っておきたい　仕事のいろは」

２月～３月の毎週水曜日、全５回シリーズで、学生や若い社会人向けの仕事の基本スキルを学ぶビジネス講座を開講した。講師は刈羽村在住の中小企業診断士、吉越喜宗さん。５月から同様のテーマで第２期を実施予定である。

（７）ボランティア受付窓口としての機能

まち研の存在が地域に次第に定着してきたためか、しばしば地域の様々な活動への学生のボランティア参加などの問い合わせをいただくことがある。新しいまち研の運営体制では、様々なゼミ、団体の学生がまち研を使用することになり、特定の「まち研所属」メンバーという学生はいなくなったのだが、まち研はこうした問い合わせの受付窓口としての機能をもち、両大学学生の地域貢献活動への参加を促す役割を担っている。今年度はここ数年継続的に参加している「どん GALA！祭り」のボランティアスタッフや、「ほんちょうマルシェ」への出店依頼などがあり、まち研を通じて各大学へインフォメーションし、実際に学生の参加へとつなげることができた。

写真 16「どん GALA！祭り」のボランティアスタッフの様子

３．成果と今後の課題

以上のように、４年目のまち研は実施体制の全面的な見直しによって、それまでの３年間に取り組んできた活動とは随分違う印象を受けるものであったと言えよう。しかし、そこには勿論、前年度までに行ってきた様々な活動と、それらを通じて学生や教職員が学んだこと、商店街や地域の方々とのつながりが基本にあり、４年間継続することではぐくみ、展開してきた事業であることは間違いない。以下では、前年度までと平成 27 年度の活動を比較し、そこから見えてきた成果と課題を挙げ、次年度のより効果的な事業実施へとつなげていきたい。

◆成果（自己評価）

・まち研を活用する学生、教職員数が増え、さまざまな形でまち研（拠点、予算）の活用ができた。特定のメンバーのみで活動していたときよりも、拠点の稼働率が高くなった。また、二大学内でのまち研の活動に対する認知度が高まった。

・まち研のイベント、講座の形態、内容が多様化することで、そこに参加する市民の年齢層が拡大した（小学生から 70 歳代が参加）。

・「柏崎に関する研究発表会」で複数のまち研関係企画が発表するなど、各大学の専門性や学内での活動、研究成果を活かした企画が実施できた。

・それまで一部の学生、教職員に集中していた負担が軽減され、自分たちの活動目的、興味関心の範囲でまち研に関わることが可能となった。

◆課題

・まち研全体を統括する「運営委員会」は教職員で構成されるため、従来のような「まち研の代表」という立場の学生が存在しなくなったが、そうした体制の変更が地域の方に伝わりにくい場面があった。また、多くの学生がまち研を活用するようになったが、商店街の方々との継続的な交流という意味では、「顔馴染みの学生」といった特定の学生の顔が見えにくくなった。

・個々のチームによる活動が多くなり、二大学の連携、協力の場面が限定されていた。

・まち研の拠点を必ずしも上手く活用しきれていないチームも見受けられた。

平成 27 年度のまち研では、両大学の様々な団体、ゼミが自由に拠点を利用するスタイルに変更した。それぞれの団体、ゼミによってアプローチの仕方は異なるが、まちなかや柏崎を活気づけたいという目的はみんな同じである。次年度も原則的には新しい体制を継続実施していく予定だが、上記のような評価できる点と課題との検討を随時重ねながら、その時々の学生たちの興味関心や大学の専門性を発揮して、まちを元気にする活動を活発に実行できる枠組みを今後も目指していきたい。